

ねえ、答えて

C・H

神奈川県・三三・会社員

ねえ、教えて。

これからもうずっと、私たちは友達で居続けるの？ 次の十年も？

それ以上は、ないのかなあ。

あなたと二人で出掛けるのが、好き。でも、もっと好きなのは、その前の待ち合わせだったとして。

せっかちな私と、遅刻魔のあなた。待つことに飽きちゃうと、私はすぐに約束の場所を離れてしまう。すると、あなたが携帯を鳴らしてくれる。

ごめん、どこにいるの？

そうして始まる会話で、居場所を探り合いながら、人混みをかきわけて近付き合っていく。ちよつとわくわくする瞬間。

あつ、発見！

いつものように、人混みでも目立つ長身のあなた。でも、私も負けてないから、あな

たも見付けやすいでしょ？ こんな時だけは「規格外サイズ」っていつも笑い合う、自分たちの身長に感謝するよね。

あなたが視界に入ると、なんとなく安堵感^{あんど}を覚えて、手元の電話をそつと切る。

そして、私の中に膨らむ、照れ臭いような、拗ねた^すような、くすぐったい気持ち。子供の頃、迷子になった私を探しにきた父親と顔を合わせた時みたい。そんな思いを隠すように、少しだけ下を向いて、私はあなたに歩み寄る。

でも、本当は、この暖かな気持ち、あなたにも感じていて欲しいんだけどな。

周りの人よりもちよつと高い視界で、ちよつと足早に街をゆく私たち。いつまでも、こんなふうにあなたの横で同じものを見て、同じリズムで過ごしていたい。

ねえ、答えて。

私が昔からそう思っていること、気付いているでしょ？

今度会うときは、真つすぐあなたを見て駆け寄るから。

*本当に十年、危うい友達です。